

佑啓

ゆ う け い

発行 者

社会福祉法人 佑啓会

理事長 里見 吉英

〒290-0265

千葉県市原市今富 1110 - 1

TEL 0436-36-7611

FAX 0436-36-7612

編集者 広報委員会

共生

高橋 俊寿

平成29年度より佑啓会の評議員を拝命しました高橋俊寿と申します。この度、「佑啓」への表紙記事執筆のご依頼をいただきましたため、お恐れ多いことと恐縮しておりますが、お目汚し失礼いたします。

淑徳大学は「大乘仏教の理念」を建学の精神として、昭和40年に創立されました。大乘仏教の精神に基づき、社会福祉の増進と教育による人間開発・社会開発に貢献する人材の育成を目的とし、福祉教育に力を入れ、教育活動を行っています。

まず、簡単な自己紹介からさせていただきます。私は、昭和62年に千葉県で生まれ育ち、市原中央高校、そして淑徳大学総合福祉学部を卒業し、現在、淑徳大学にて職員として勤めております。淑徳大学は、千葉、東京、埼玉に計4キャンパス6学部をもつ大学であり、約3万4千名の卒業生が社会で活躍をされています。私の勤める千葉キャンパスにおいては、総合福祉学部、コミュニティ政策学部の2学部があり、佑啓会にも卒業生が多くいらつしやり、様々な世代でご活躍されていると伺っております。



「建学の精神」という言葉は、皆様には聞きなれないと思われるかもしれませんが、私立学校には、その存在を支える「建学の精神」が必ず存しています。日本の国立学校は「国及びその機関は、宗教教育その他いかなる宗教的活動もしてはならない」とする憲法第20条を遵守し、学校教育の中から宗教を極力排除してきました。しかし、教育基本法第9条には「宗教に関する寛容の態度及び宗教の社会生活における地位は、教育上これを尊重しななければならない」と定められ、私学においては、宗教を尊重し、教育の中に宗教的なものを取り入れてもなんら支障はありません。実際、宗教に基づく教育理念をもつ私立学校は数多くあり、宗教に限らずとも、私立学校はそれぞれの建学の精神に基づき、教育活動

を行っています。建学の精神とは、その大学の存在意義そのもののなのです。淑徳大学の建学の精神は「共生」の言葉で表すことが出来ます。卒業生の方は記憶に残っている方もいらつしやるかと思われませんが、学祖が生前に残した「Not together with him（彼の為にはなく、彼と共に）」という言葉があります。これは、仏教でいう自利利他の精神であり、今日の「共生」の思想といえるでしょう。



福祉と関わっていると、「恵まれない人々のために役に立ちたい」といった言葉をよく耳にするかと思いますが、「役に立つことによつて、自分自身はどのように変わるか」を深く理解することが重要なのだと説いています。医者は難病の患者にかかわることにより名医となるのであり、教師は問題のある生徒に対することにより真の教師となるのです。医者にとつて患者はまさに師であり、問題のある生徒こそ、何ものにもまさる導師といえるのではないかと思います。さて、前置きが長くなつてしまいましたが、私がなぜ佑啓会の評議員をすることになったかという点、里見吉佑常務理事からの一言がきっかけでした。

彼とは、高校の同級生でした。目立ちたくない、平和主義の私と、良くも悪くも目立ち、破天荒な彼、性格はほぼ正反対の二人ではあります。不思議と意気投合し、共にいる時間が多くありました。学生時代の彼を見てみると、福祉の世界に身を置く人間だとは夢にも思いませんでしたが、現在、佑啓会の看板を背負つて先導し、頑張っている姿を見ると、人は変わるものだなと驚かずにはいられません。お互いに社会人となり、仕事の話をする機会も多くなりましたが、彼が佑啓会の話をするときは、とても楽しそうに話しているのが印象的でした。学生時代、福祉の「ふ」の字も発しなかった彼が、こんなにも楽しそうに話す仕事とはいったいどんなものだろうと、いつも興味深く話を聞いていました。

そしておよそ2年前、彼から、佑啓会の評議員をやつて欲しいと依頼がありました。話を聞いてみると、社会福祉法等の一部を改正する法律により、社会福祉法人への評議員会の設置義務化となるため、評議員となれる人を探しているとのことでした。同じ県内で、福祉教育に力を入れている淑徳大学へ勤めているということで、私に声をかけたとのことでした。実のところ、最初その話を聞いたときはお断りをしていました。私自身、総合福祉学部を持つ大学に勤めてはいませんが、大学事務職員としての知識、経験しかなく、福祉に対する専門的な知識、経験があるわけはありません。その

ような私が、障害福祉を牽引する佑啓会の評議員を勤めることは失礼だと感じたからです。しかし、彼の熱意と、「こんなにも面白い仕事はない！一緒に社会を動かそう！」という言葉聞き、評議員の仕事を受ける決意をいたしました。



近年、大学を取り巻く環境は急激に変化をしています。文部科学省の方針として、大学の強みをより活かすため改革をする大学に対して、補助金等の支援をするような流れとなつてきており、今まで通りではすぐに取り残されてしまう時代となっています。そんな大学改革の一面として、大学間や、地域、行政機関との連携も強く期待されており、本学においても、「産学官連携プラットフォーム」というプロジェクトが発足しています。これは、地域内の複数の高等教育機関が連携するとともに、行政や産業界と協働・共創すること、高等教育機関の「魅力」を高めるとともに、地域の課題解決力を高めることを目的としているのです。

そんな時代背景の中、佑啓会からの申し出もあり、昨年より、佑啓会施設利用者の就労支援の一環として、淑徳大学の敷地内にて、お昼時にパンの販売を行っています。まだ数回の実施ではありますが、パンを購入した人の話を聞いてみると、美味しくて安いと非常に好評でした。私自身も、昼食と併せて家族へのお土産として持ち



帰ろうと思ひ、6、7個程パンを購入させていただいたのですが、食べてみるとあまりに美味しく、帰るまでには一人で完食をしてしまいました。また、パンの販売に付き添っていた本学の卒業生でもある佑啓会の職員が、在学当時の恩師と再会し、話の流れで、社会人の先輩として、学生に対して仕事の話をすることとなったという話も伺っております。

第十五回自立支援 セミナーに参加し

宮井 清智

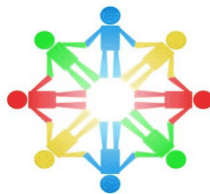
2月3日(日)、「豊かな住まいの支援と課題」というテーマで第15回自立支援セミナーが開催され、ふる里学舎家族会からも40名が参加しました。このセミナーは千葉県知的障害者福祉協会主催で、知的障害者の家族・施設の職員・学校の先生等を対象としたものでした。

セミナーの最初に千葉県知的障害者福祉協会里見会長・社会福祉法人佑啓会理事長の開会挨拶がありました。挨拶の中で、「65歳問題(障害者福祉サービスを受けている障害者が65歳になると介護保険サービスに移行しなければならぬ問題)」「短期入所180日問題(短期入所は年間180日しか利用できないため利用者が行き場を失う問題)」などの紹介がありました。また障害者福祉に携わる人の人材確保の問題も紹介されました。障害者福祉に携わる方々の大変さをあらためて認識するとともに、知的障害者の親として、施設で働いておられる職員の方々に応援しなければならぬことを再認識しました。また、障害者福祉を前進させて障害者のQOL(生活の質)を守るためには、障害者、特に自分では意見をうまく伝えることのできない知的障害者に代わって「家族」が声を上げなければならぬことがよくわかりました。



続いて、「人」が「主」人公になる「住」まいを目指して」という題でのシンポジウム(コーディネーター：太久保学園施設長 千日清氏、シンポジスト：野栄福祉会統括施設長 佐久間智氏、まつぎ会社会統括施設長 早坂裕美子氏、まつぎ会社会統括施設長 中村敏久氏)がありました。シンポジウムでは「高齢化とグループホーム」「通過施設とグループホーム」「入所施設の住まいの充実」などについて話がありました。3人のシンポジストからは、グループホームでの生活、入所施設での生活について紹介がありました。皆さんそれぞれの状況は異なっていますが、どんな障害者の立場に立って施設を運営されていることがよくわかりました。また、シンポジウムの最後は、コーディネーターから入所施設でも住みやすい生活環境の改善が可能であるという話がありました。

ふる里学舎には入所・日中活動・グループホーム・就労・障害児等、様々な支援がありますが、地域に溶け込んで運営されています。障害者総合支援法の理念である「地域社会における共生の実現」は、入所施設でも十分実現できることを広くアピールすることが重要と再認識しました。また、障害者の住まいには色々なタイプがあります。が、個々の障害者に合った多様な選択肢を確保することの重要性を再確認できました。



最後に、元東レ経営研究所社長 佐々木常夫氏による「私は仕事も家庭も決ってあきらめない」という題の講演がありました。佐々木氏は、ご長男が自閉症で、奥様が肝臓病とうつ病を患われましたが、家庭と仕事を両立されました。講演では、困難な状況でも「愛は責任である」「運命を引き受けよう」という考えで前向きに取り組んだことなどの紹介がありました。家庭と

仕事を両立するためには、家庭にかけられる時間は削減できないので、仕事のやり方を革新されたことがよく理解できました。私の長男は自閉症、強度行動障害で、ふる里学舎蔵波に入所していますが、私が現役の時は海外単身赴任生活が長く、家族との時間を十分に持つことが、ふる里学舎に協力することが十分でできませんでしたが、これからは、家族との時間を大切に、ふる里学舎にもできる限り協力したいと思っています。

障害者、特に知的障害者のおかれた環境の将来は、決して楽観できるものではないと認識しています。少しでも障害者のQOLを高めるためにも、障害者の家族が視野を広げ、障害者福祉に携わる方々を応援することや、社会に向けて障害者の生活の実情を伝えること、意見を発信することの重要性を再認識しました。また、障害者の家族一人ひとりの声は小さいですが、施設(ふる里学舎)の力を借りて、家族の声をまとめて発信することが重要であることも再認識しました。このような機会を与えていただいた千葉県知的障害者福祉協会の皆様に感謝いたします。(蔵波3寮利用者 保護者)



2月18日から1週間、真冬の日本を離れ、真夏のオーストラリアへ出発。昨年の4月1日に永年勤続者として法人から海外旅行をプレゼントされた。どこが良かったか悩んだ結果、海外初心者マークの我々でも楽しめる国、オーストラリアに行かなくては頂く事として成田空港では出発前の恒例儀式として喉越し良くキレのある炭酸飲料を飲み干し、気分良く飛行機に乗り込む。機内でも呑もうと勇んでみたものの、殆どのCAは外国の方で、上手くコミニケーションが図れず所望のモノは



雄大に広がる海岸線

そんなこんなで夜明けと共に、最初の観光地ゴールドコーストに到着。当たり前だが、辺りを見回しても外国人ばかり。右も左も分からない、言葉も通じないまま展望台へ行ってとりあえず記念撮影。そこで出会った日本人老夫婦に、旧知の仲のような親近感を抱いた。

さすが南国、日差しが強く圧倒されるが以前から南国風の顔立ちと体型と言われる自分は順応も早い。全長57kmの海岸線はサーフィンの聖地とも呼ばれる場所。せっかくなので体験したいとともう一人の同行者に唆され、危うく大波をばたいてサーフスクールに申し込まれそうになったが、何とかサーフボードを二人で1本レンタルするに留めた。翌日、サーフボードを抱えていざビーチへ!

まずは自称経験者の同行者がボードを持って颯爽と海へ入る。が、沖へ漕ぎ出すも波が多いのと風の影響が徐々に左へ流されていく・・・遊泳区域に入らないよう必死に漕いでいるが、どんどん流されていく。波にも乗れずひたすら漕いでいる・・・あいつは何の経験者だったんだらう。暫く漕いで疲れたのか戻ってきて「駄目だ。コンディションが悪い」との一言。コンディションの問題か??

次は自分。経験じゃない、センスと根性だ!サーフボードを持って海へレッツトライ。が、数分後には浅瀬に迷い込んだクジラの如く、浜辺に打ち上げられていた。後は想像の通りで、夜の反省会へと続くのであった。中心街(サーファースパラダイス)と云えど、大きな街ではない為に夕食

の店選びに何往復もする小心者2人。気付けば1日の万歩計が1万5千歩を越えていたが、何とか旨いビールとオージービーフに辿り着く。オーストラリアでは地ビールの銘柄が多く、全てを堪能するにはお財布と肝臓に相談する必要がある。アルコルは3.5%、あまり濃さは無くて飲みやすい感じ。オージービーフとの相性も抜群で、どんどん飲めてしまう・・・道理で体格が良くなるわけだ!ワインも美味で、ワイナリーツアーの後からはこそりハマっている。オーストラリアは治安も良い国である。夜の繁華街を闊歩しても、何ら危険な事には遭遇しなかったが、妖艶なお姉さんが手招きをしている。甘い蜜に吸い寄せられそうになるが、チラつく嫁の顔。オーストラリアにまで来て、嫁の顔を思い出すとは良き夫である。そんな難敵は居たもの、おっさん2人で酒を買い込み、ホテルに戻って飲み明かす。

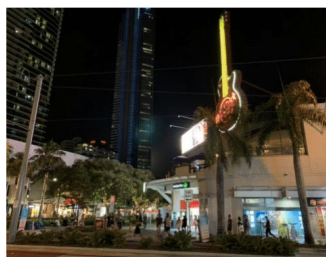


ワイナリーでおっさん2人仲良く乾杯!

ゴールドコーストを後にし、続く北東部の町ケアンズ。赤道に近い事もあり、到着時は39℃もあった。此処では世界遺産でもあるキルラダ観光やグレートバリアリーフといった広大な珊瑚の海を満喫した。日本人観光客も多く、ガイドも日本人。その場だけ見れば、国内ツアーだが、スケールの違う熱帯林や透き通る海を見ると改めてオーストラリアに來た実感。ケアンズでは力ジンを初体験!訳も分からないままルレットに挑戦するが、惨敗。多額のチップを贈っている人の遊び方を見習い、後日リベンジ。初日の分を奇跡的に取り返すも、何だかんでマイナス収支。結局夜は反省

会という名の酒三昧・・・

ゴールドコーストでの経験から、店に入って注文するのも慣れたものである。内心ドキドキしながらも地ビールやワインを堪能した。物価が高いので深酒はホテルに戻ってから。街の酒屋で流暢な英語を駆使して。お勧めのワインを聞いてみる。「サンキュー」と答えながらも何が何だか分からず店の人が手にしていた物を買って飲んでみる。お勧めだけあって確かに美味い。明日旅行も終わりがかと思うととても寂しい気持ちになったが、佑啓会で働かせて貰っているから今回の経験が出来たと思うと、改めて法人に恩返しできるようにとワイン片手に誓ったのであった。



ゴールドコーストの煌びやか夜

様々な経験をさせて貰えたことは本当に有り難く、理事長や幹部の方々そして職員に大いに感謝したい。コミニケート出来ないものかしら?があつたが、その気持ちを支援に活かそうと思う。

この様な貴重な機会を頂けたことに感謝し、これからも法人の為に頑張ろうと思え旅行であった。ありがとうございました!(アネッサディセンター 支援員)



編集後記

3月も後半、もうすぐ30年度も終わりと成ります。今年度も佑啓を愛読いただき、ありがとうございます。4月には出会いの季節。新たな人との繋がりが生まれ、31年度も新たな仲間たちと共に歩んでいくことでしょう。良き出会いに胸躍らせつつ、佑啓第107号をお送りします。(支援員 古田 祐一)